第1章　ひとりでいけないこと

1　環季コハル、女子更衣室に忍び込んで好きな女の子のセーラー服を着る。

こんなこと……こんなこと……いけないのに……。

僕は女子更衣室の前にいた。辺りを見回す。今は授業時間だから、辺りはしんと静まりかえっている。廊下の底に沈んでいる空気の流れてくる音すら聞こえてきそうな沈黙だった。

クラスのみんなは3時限目の水泳の授業で大はしゃぎだった。僕は1人気分が悪くなって、授業を休んで保健室へ向かった。だから本当の僕は保健室にいるはず……。

なのに僕は女子更衣室の前にいた。こんな場所にいてはいけないはずなのに……。

僕の胸は痛いくらいにズキズキと跳ねている。ハアハアとかすれる息を漏らしていた。体は熱いのか寒いのかわからない。でも胸の奥はなんだかわからないもので昂揚している。それが「いけない、いけないのに……」と思いながら僕を突き動かそうとする。

こんなのはいけないこと……わかっているけど……。

実は女子更衣室に忍び込むのはこれで3回目。1回でやめようと思った。2回目の時も、もうこれきりだ……と心に決めたつもりだった。なのに僕はまた女子更衣室の前にやって来てしまった。

僕は自分の胸に手を置き、すーと息を吸う。僕の掌に大きな襟とネクタイが触れた。

僕くらいの年代の学生にはあまり制服ってないものだけど、僕の学校にはあった。小学生から中学、高校まで一貫校だから、学校全体で統一感を出すために、小学生でも制服があった。制服は男子も女子も上は襟の大きなセーラー服。今は夏だから半袖。ブラウスも襟も白で、襟に赤のラインが1本すっと引かれている。ネクタイも同じ赤だった。下は男子はズボン。男の子はともかく、女の子がこの制服を着るとやたらと可愛かった。

僕は胸に当てた手をすーっと下へと下ろしていく。掌をお腹のところで止めて、その先にあるものに目線を落として見る。黒のズボン。その股間のところが、モッコリ盛り上がっている。

そう、それだ。僕をいけない気持ちにさせる。そこからせり上がってくる欲望に、僕はずっと抗えないでいる。だけどどうにもならない。このきかん坊を抑えるためには……。

僕はお腹に当てていた手をスッと横へ逸らし、ズボンのポケットに手を入れた。ポケットから女子更衣室の合い鍵を引っ張り出す。これも、本来ここにあってはいけないはずのもの……。

鍵を鍵穴に差し込み、捻る。

カチャリ。

辺りが沈黙していたから、解錠の音がやたらと強く響く気がした。ビクビクしっぱなしの僕は、ハッと辺りを見回す。誰かに聞かれたりしないだろうか。という以前に女子更衣室に忍び込もうとする僕の姿を目撃されたりはしないだろうか。

大丈夫。誰もいない。物音一つしない。辺りを念入りに見回しても、この空間にいるのは僕だけだった。

僕は女子更衣室のドアをそっと小さく開き、小さく開いた隙間に体を潜り込ませて、すっと音を立てずにドアを閉めた。内側からカチャッと鍵を閉めて――ようやくふぅっと溜め息を一つ漏らした。

緊張から一つ解放された。もう誰からも目撃されることのない密室に入っていった。

でも胸の奥にこもるようなザワザワ感は収まらない。だって僕は女子更衣室の中にいる。こんなところ、人に見られたら……。怖い。どうしよう。なのに僕は自分を抑えることができな

い。怖いはずなのに気持ちは奇妙なくらい高揚して、そのおかげで僕はずっと胸をドキドキさせ、ハアハアと喘ぐような呼吸をしていた。

僕は女子更衣室の中を見回した。女子更衣室は教室を半分に割ったくらいの広さがある。壁をぐるりとロッカーが囲んでいて、中央の空間にもロッカーがひとセット、背中合わせになって置かれている。ロッカーの足元には簀の子が置かれ、ロッカーとロッカーの間の通路には木造のベンチが置かれていた。

僕は用心して足音を抑えて、念のため中央ロッカーの向こう側を覗き込んだ。奥の壁はすりガラスが設置されていて、そちらのほうは光が差し込んでくる方向じゃないけど、夏で日差しの強い頃だからくっきりとした光をその手前のロッカーに投げかけていた。その周辺をしっかり確かめたけれども、人影はどこにもなかった。

女子更衣室は複数のクラスが同時に使えるようになっていた。場合によっては違う学年も共同で使うこともあった。それくらいの広さとロッカーの数はあった。

それなりに年数を経た部屋なので、カビ臭い木の香りがした。でもそのカビ臭さを押しのけるような、甘く囁くような香り……。僕はその香りに少女特有の何かを感じ取って、気持ちをざわざわさせる。僕は誰もいないという安心を得たおかげなのか、少し開放的な気分になっ

て、すーっと深く息を吸って、空間に漂う甘い香りを肺一杯に満たそうとした。その空気を吸うたびに、僕はフワフワとした、ちょっと気分が弾むような感覚になった。

女子更衣室の中、という場所に感動している場合じゃない。もうここまで来ちゃったんだ。後戻りはできない。目的を果たそう。早くしないと授業が終わってしまう。3時限目は水泳の授業だから、いつもより少し早く終わるはずだ。

僕はくるっと回れ右をした。目当ての場所がどこだかわかっている。入り口から入って左に曲がって5番目。壁の方から数えて2番目。そこがいつも彼女が使っているロッカーだ。女子更衣室に忍び込むのはもう3回目だから、もう探す必要もなかった。

僕はそのロッカーの前まで進み、取っ手に手を置いたところで止まった。

今日もあの子はここで服を脱いで……パンツも脱いで真っ裸になって……何も身につけていない裸に、水着という頼りなげな布だけをまとって……。その女の子だけではなく、クラスみんながここで裸になって……。

僕はその光景を思い描いてコクリと喉を動かす。女の子みんなが裸になったその場所に、男子の僕がいる。なんてことだろう。それを思うと体全身でゾクゾクするような気がした。

いけない、いけない。こんなところで感慨にふけっている場合じゃない。躊躇っている場合

じゃない。早く済ませて、早く去ろう。

僕はロッカーを開けた。するとふわっと柔らかい香りが立ち昇ってきた。

ああ、あの子の香りだ……。

やさしく、少し熱気のこもった香り……。匂いだけでわかる。大好きな女の子だから。その女の子とはほとんど接点はないけれど、側に近付くと、いつも鼻を大きくしてその子の匂いを嗅いでしまう。もう匂いだけでその女の子を特定できるくらいだった。

僕はロッカーの中を覗き込む。上のポール部分にハンガーが２つ吊されて、セーラー上衣とスカートが吊されている。下段の網部分に、鞄と――パンティとキャミソールがきちんと畳んで置かれていた。

あの子のパンティだ……。

僕は感動で高まってしまった。すぐにでもそのパンティに手を伸ばして……。いやいや、まだだ。

僕は念には念を押して、セーラー上衣の裾をつまみ、内側をぺろっとめくってみた。内側に付けられたタグのところに、名前が書かれてあった。

若草サクラ。

間違いない。僕は好きで好きでたまらない女の子の名前。ここは若草サクラが使用しているロッカーだった。

僕は1歩下がると、いそいそと制服を脱ぎ始めた。皺が付くとか気にしていられない。バッと脱いで、ベンチに放り投げた。ズボンがベンチから落ちたけれど、気にしている場合じゃなかった。パンツも投げ捨てた。気持ちが焦っていたし、早くその行為を始めたかった。

僕はあっという間に真っ裸になった。女子更衣室の中で裸。ある意味、本来あるべき状況かもしれないけど、僕は男子……女子更衣室の中にいてはいけない。僕は自身でそんな異常さを作り上げてしまって、気が狂うような心地になった。

裸の僕は、小さな体だった。クラスの中で一番背が低い。体も細い。運動もしないので色も白い。裸になっても少年なのか少女なのかもわからない。そんな裸だった。

唯一男子であることを示すおちんちんが強烈に勃起していた。僕がまだ大人じゃないからかもしれないけれど、おちんちんは勃起していても小さかった。僕くらいの年代の子なら普通かもしれないけれど……小っちゃいことはちょっと気にしている。小さいうえに頼りなげなく

らい細く、先端まで皮が被って、その皮被りおちんちんの先端から、もうヌルヌルしたいやらしい液体をとろりと垂らしていた。おちんちんだけが気持ちが前へ前へと進んでいて、僕自身がおちんちんからせり上がる欲求に突き動かされているような状況だった。

僕は再びロッカーの中を覗き込む。まず、若草サクラのパンティを手に取った。まるでハンカチのように綺麗に畳まれていたパンティを開く。小さく頼りなげな白の木綿の布。ポツポツとサクランボの模様が散らされている。正面のところには添えるような赤いリボン。縁が細かなレースで縁取られている。男子のパンツでは絶対見られないような繊細な作り。柔らかな布地。

僕はそのパンティを掲げて広げ、次にパンティを顔に押しつけた。パンティで顔を拭うみたいにゴシゴシして、すーすーと息を吸った。

あの子の股間の臭いだ……。いつもあの子から感じている香りを濃厚に感じた。甘酸っぱく、その甘酸っぱさの向こうにとろりとする生々しさを感じる。若草サクラの存在をより強く感じた。

サクラちゃんの……サクラちゃんの……オ、オマンコの……匂い。

若草サクラは朝、このパンティを選んで履き、3時限目のこの時間まで若草サクラの股間に

ぴったり貼り付いていた。何よりも若草サクラの体臭がしっかり染みついているはず。きっと何度かトイレに行ったはずだから、おしっこの残滓もこのパンティに残されているはず。

コハル「はぁ……サクラちゃん……サクラちゃん……サクラちゃん……」

僕は無意識に若草サクラの名前を譫言のように呟いていた。パンティ布を顔に擦り付けて、その柔らかな感触と香りを楽しんだ。

このパンティを被りたい。パンティに染み付いた匂いをダイレクトに感じながら、欲望のままにおちんちんをシコシコしたい……。

いや待て待て。それは2回目に忍び込んだ時にすでにやった。2回目に忍び込んだ時は、若草サクラのパンティを被り、キャミソールを着て、おちんちんをスカートに包んで射精した。また同じことをしたい欲求はある。でも女子更衣室に忍び込むなんて体験はそう何回もできるものじゃない。前回とは違うことを……というか前回するつもりだったが、思わずパンティを被りたいという突然やってきた衝動にかられてしまったために、できなかったことを今回やるんだ……！

僕は身をかがめて、パンティを広げると、片足を上げてパンティの穴に自分の右足を通した。もう片方の穴にも足を通す。

姿勢を戻しながら、スルスルとパンティを持ち上げていった。パンティの布が僕の脚を通っていく。意識しすぎているせいかもしれないけれど、男子のパンツを穿く時とはぜんぜん違う気がする。布地がやさしくて、足を通すだけでいやらしい気がしちゃう……。

パンティを股間のところまで上げる。ぶらりと垂れ下がった陰嚢を薄布が持ち上げて、勃起したおちんちんをその中に格納する。股間全体がやわらかいものに包まれている感じがする。男子パンツのざっくりと股間を覆っただけという雑さとぜんぜん違う。そっと優しく包まれる感じがあった。サイズはぴったりだった。こんな時に、体が小さくて良かったと思う。ただおちんちんの勃起は強烈で、パンティの布地におちんちんの形をくっきりと浮かべていたし、その先端に浮かんだとろみがパンティにじわりと染み付けてしまう。

穿いちゃった……サクラのパンティ……穿いちゃった……。

それだけで僕は狂いそうだった。おちんちんが猛烈な欲求を訴えてくる。コシコシしたい。計画を中断してコシコシしたい……。

でも我慢。我慢だ。これはまだ完成形じゃないから。

僕は続いて、パンティの下にきちんと畳まれていたキャミソールを手に取った。全体が真っ白で、胸のところに添えるようなリボンが付けられているだけのキャミソール。それをするっと

着る。キャミソールも男子もののシャツなんかとぜんぜん違う。やっぱり柔らかな布地の感触。それに、胸のところにパッドがあった。

サクラちゃんはもう胸は膨らみ始めているのだろうか。外側から見ると、胸が膨らんでいるのかどうかはよくわからない。でも、パッド入りキャミソールを着ているということは……。もう胸の膨らみがあるとしても、きっととてもささやかなもので……。それが若草サクラらしくて可愛く感じた。

靴下も……水泳の授業だから靴下も脱いで畳まれ置かれていた。僕は靴下も一度鼻に当てて香りを堪能してから履いた。靴下はさすがに男子のものと感触は同じだったけれども、若草サクラが履いていたもの……と思うとそれだけで興奮させてくれる。

次にロッカーの上部分に視線を上げる。そこに、セーラー上衣とスカートが吊り下げられてあった。スカートは真っ黒。何センチかわからないけれど……いつも思っているけれどすごく短い。セーラー上衣は男子のものと同じデザインで、大きな襟は白で、赤いラインが1本すっとと引かれているだけ。赤いネクタイがセーラー襟に引っ掛けられていた。

僕はまずスカートを手に取った。クリップ型のハンガーから外し、ハンガーはポールに戻す。男子は教室で着替えることになっているから、女子がこんなハンガーを使っていたなんて、女

子更衣室に忍び込むまで知らなかった。
スカートを穿く。いそいそと気持ちをはやらせながらスカートを穿き、ベルトのホックを閉じてファスナーを上げる。
ぴったりだった。調節も不要だった。変な隙間もないし、締め付けも厳しくない。嬉しい。
ということは僕は若草サクラとウエストサイズが一緒なんだ。
小柄な体型で良かった。僕は周りの男子より、一回りも二回りも体が小さい。男子か女子かわからない……いつもからかわれていたし、僕自身コンプレックスだった。でも今はそのおかげで若草サクラの制服を難なく着られてしまう。こんな嬉しいことはない。
スカートを穿いた感触は……驚くほど股間に空気が入り込んでくる。なんて危うげなんだろう。でも気持ちが昂ぶっているせいか、その危うさも僕を興奮する材料だった。
次はセーラー服だ。ハンガーからセーラー服を外す。セーラー服はどうなっているんだろう。男子セーラー服と同じものだと思うけど……。
とりあえず、セーラー服に袖を通してみる。腕が細いおかげで、カフスのところも難なく手が通る。
セーラー服を着て腋のファスナーを上げて……この時点で男子セーラー服と違っていた。小

さい。いや、丈が短い。それにふわっと体にまとわりつく感じ。男子セーラー服はTシャツみたいにだぼっとしている。同じ素材かと思いきや、いやきっと同じ素材なのだと思うけど、なにかもっと繊細なものを着ているような感覚になった。

それに、セーラー襟も大きい。セーラー襟下のボタンを締めて、前当てのボタンを留めて……。その手元の感覚が普段とぜんぜん違うから、すぐに大きさの違いに気付いた。同じデザインだと思っていたけれど、こうして着て較べてみるとぜんぜん違う。「女子のもの」という感じがあった。男子制服よりもはるかに繊細で丁寧に作られている感じがあった。こんなに質の高いものを……というか、こんなに可愛いものを着ていたのか、という驚きとともに、女子にゆるやかな嫉妬を感じた。

2　環季コハル、女子更衣室でセーラー服を着てオナニーを始める。

セーラー服に引っ掛けてあったネクタイを結んで……完成だ。

ついに僕は好きな女の子の……若草サクラのセーラー服を着てしまった。今の僕はどんな姿をしているのだろう。鏡がないから確かめようもない。意外に似合っているのだろうか、それとも体格が合わず不格好になっているのか……。とにかくも女子セーラー服を着てみても体のどこにも無理を感じない。制服がぴったりと体にハマる感じはあった。

そういうフィット感とは別に、僕は好きな女の子のセーラー服を身にまとった感動と興奮で高まっていた。

なんか……すごい。サクラちゃんに包まれている感じがする。サクラちゃんのいい匂いが、僕の全身から漂ってくる。

僕はハアーハアーとかすれる息で深く呼吸をし始めた。胸が興奮したように膨らんだり萎んだりしている。全身にみなぎった高ぶりが、ストンとある一点に、股間に凝縮する感覚があった。おちんちんはスカートの内側、パンティの中だけど、猛烈に熱を持って存在を主張し始めている。

でも僕はあえて自分の気持ちにお預けをした。セーラー服の上から掌を当てて、自分の体をなぞった。自分の手だけど、まるで誰かから痴漢されている様な手つきで、セーラー服の上からしつこく掌を這わせていく。

セーラー服の質感、襟の立体、ネクタイの感触……本当いうと男子セーラー服をあまり違いはないけれど、女子セーラー服でしかも若草サクラのもの、と思うと特別なもののように感じ、ただ触っているだけでもいやらしい気持ちになる。

掌でセーラー服の触感を味わうと同時に、掌で体を触られているという感覚も味わった。自分の手だけども、まるで自分の手じゃないみたい。掌で押しつけているから、肌にセーラー服とキャミソールの質感を直に感じる。若草サクラの制服を自分の肌に直接押しつけている感じがあったし、胸やお腹をさわさわ触られている感触に性的な心地がじわじわ高まっていく感じがあった。

やがて僕の掌はお腹から腰へ、セーラー服の裾からスカートのベルトへと越境する。ヒラヒラした頼りなげなプリーツスカートのひだが掌にまとわりついてきた。僕の掌はおへそからその下へ入りかけて、その辺りを撫でるたびにスカートの裾がふわふわと揺れた。それとともに、僕の股間に空気が流れ込んでくる感じがあった。

僕はどんどん高まっていた。その高まりはストンと僕の一番いけないところへ……股間の勃起へと集約されていく。パンティの中でおちんちんが熱を持ってビクンビクンと脈打っていた。

僕は自分のおちんちんが昂ぶっていることに気付いていたけれど、まだだ、まだ早いと自分で自分をはぐらかした。まだそこに至るまでの過程を楽しみたい。女子更衣室の空気を嗅ぎながら、好きな女の子のセーラー服と一体になっている今の瞬間を楽しみたい。

僕はもう一度掌で自分の胸元に戻り、まるで痴漢の手つきで、自分の真っ平らの胸を揉んだ。それから、乳首のところを指先で軽く摘まんだ。

コハル「うんっ！」

全身がビクンと震えた。オナニーの時、時々自分の乳首を弄ったりするけど……今の感覚はなんだろう。女子セーラー服を着たせいだろうか。一瞬体が女の子になったような気がした。

僕、僕、なんか変になってる。なんだろう、なんだろうこの感覚。

僕はもうしばらく乳首をさらさらと弄った。胸を中心にゾクゾクするものが高まってくる。この感覚がなんなのかわからないけれども――好きだ。好きだ、と直感した。

セーラー服を満足いくまで探ると、僕の掌は再び下へとおろしていった。がに股姿勢になり、ヒラヒラと広がるプリーツスカートをしっかり抑えて、掌をゆっくりと降ろしていく。

ついに、僕の指先がおちんちんの先端に触れた。

コハル「はぅ……！」

僕はたまらず溜め息を漏らした。オナニーなんて、家で何度もしているのに。僕の体はおかしくなっていた。やたら敏感になっていて、少し触れただけでも爆発しそうだった。

若草サクラのセーラー服を着ているせいだろうか。それとも女子更衣室という場所がそういう気分にさせているのだろうか。とにかくも溜まらない気持ちになっていた。

僕はスカートの上から自分のおちんちんに触れる。自分のおちんちんなのに、やたらと慎重に、そっと触れた。僕のおちんちんはかつてないくらい、ビクビクしていた。不用意に触っちゃうといきなり射精しそうなくらい高まっていた。

両掌でおちんちんを両側から慎重に触れて圧迫する。よし、どうやらこれくらいならまだ射精しそうにない。僕はおちんちんにパンティとスカートを押しつけるようにゆるゆると圧迫した。スカートの上からおちんちんの形を意識して、掌をゆっくり上下させる。

コハル「はぁ……はぁ……はぅぅ……すご……はぁ……」

僕は塊のような溜め息を何度も漏らした。いつも家でするオナニーより、何倍も気持ちいい。何倍もおかしな気持ちになる。まだおちんちんを握ってすらいない、軽くさすっているだけなのに、やたらと気持ちよかった。

それだけでも充分な幸福感を味わえたけれども、欲張りなおちんちんはもっと強い欲求を求

めている。スカートの上からだけの圧迫にも慣れてくると、次のイベントを始めたくなってしまった。

僕は一度スカートの中に手を入れた。プリーツスカートの中を探り、パンティを少しだけ下へずらす。せっかく穿いたのだから、脱ぎたくない。感触を味わっていたい。だから、おちんちんの竿部分だけが出るくらいにパンティを下ろした。

なんか……それだけなのに……。

スカートで隠されているとはいえ、おちんちんが外の空気に触れている。スカートの中なのに、おちんちんを外に晒しているような、よりいけないことをしているような気がした。それに、何もしなくてもおちんちんの裏筋にスカートの布地がさらさらと触れて刺激してくるような気がした。

僕はがに股姿勢になって腰を突き出した。スカートの一部がもっこり盛り上がってくる。もう隠しようがないし、むしろ有り体に主張してしまっていた。

僕は軽く腰を前後に振ってみた。プリーツスカートがふわふわ揺れる。そのたびにスカートの裏地がおちんちんに触れるし、股間に風が流れ込んでくる。

はぅぅ……気持ちいい……おちんちん、いい……。

刺激は緩かったけれども、意想外の感触がなんとも心地良かった。

スカートってこんなにいやらしい服なんだ……。スカートがおちんちんに意地悪しているみたいだよ……。

でも僕のワガママおちんちんはもっと強い刺激を要求している。僕自身も自分のおちんちんに意地悪するのをやめて、その要求に従うことにした。

さっきみたいにスカートの上から掌で圧迫し、スカートの布でおちんちんを包むようにした。さっきと同じような手つきだけど、パンティという薄い防壁がなかったし、股間から突き出た立体物を直接触って包み込むことができた。一方のおちんちんはスカートのザラザラした触感に包まれて、なんともいえない幸福な心地になった。

僕はおちんちんをスカート布に包んだまま、ゆるゆると上下した。勢いも付けなかったし、圧迫も弱かった。おちんちんがどうしようもないくらいに敏感になっていたから、その刺激だけで充分だった。少しでも刺激を強くすると射精しちゃいそうだった。できるだけスカート布に包まれている感触を長く味わっていたくて、ゆるめのオナニーを続けた。

コハル「ハア……ハア……ハア……」

僕は口を大きく開けて、塊のような息を吐いた。口の端にヨダレがこぼれる感触があったけれども、拭わなかった。気持ちよすぎて拭っている余裕もなかったし、こぼれるままにしたい気分だった。

全身が熱い。夏だから気温が高かったのだけれど、それ以上に体の内側がやたらと熱い。火が点いたみたいだった。汗を一杯かいている。若草サクラのセーラー服に僕の汗が染みこんでいく。

僕の匂いが付いちゃう……。いけないのに……僕がこっそりセーラー服を着ていた痕跡なんか残しちゃいけないのに……。でも好きな女の子のセーラー服に僕の存在を上書きしているような気がして、たまらなかった。自分を止められなかった。

コハル「……サクラちゃん……サクラちゃん……サクラちゃん……好き……サクラちゃん……好きぃ……」

僕は目を閉じて、譫言のように好きな女の子の名前を呟いた。

若草サクラ。僕が若草サクラのことを想い始めたのは1年や2年ではなく……。小学校のはじめ頃から。ずっと好きで、ずっと一番の女の子だった。性的なことに目覚めてから、若草サクラへの想いは猛烈に強くなっていった。いつも元気で、小さな体なのに、運動が得意。勉強はちょっと苦手みたいだけど、そんなところも好き。いつも可愛く、愛らしくて、どんな衣装も似合っていて、可愛くない瞬間なんてものがない。ずっと若草サクラのことを想い続けている。若草サクラのことを想いながら、その気持ちを吐き出すようにオナニーをするけれども、

でも何度射精してもサクラへの想いは尽きるどころかより膨れ上がってくる。
サクラちゃん……サクラちゃん……サクラちゃん……好き。好きだよ。一番好き。
僕は若草サクラを頭に思い描きながら、おちんちんをコスコスした。
サクラ「コハル君」
僕のイメージの中で、若草サクラが出現した。もちろんこれは現実ではない。僕の妄想だ。
僕と若草サクラは学校の中でほとんど接点はない。僕の名前を呼んでくれたのはほんの数回……でもその数回の記憶から、何度でも脳内でリピートできたし、そこから発展させることもできた。
コハル「サクラちゃん……僕、僕、おちんちんがこんなになって……。サクラちゃん、僕のおちんちん、気持ちよくして……」
僕はイメージの中の若草サクラに話しかけた。
サクラ「いいよ。私でおちんちんこんなにしてくれたんだね。ごめんね。つらかったよね。私が気持ちよくしてあげるね」
妄想で作りだした若草サクラが、僕のおちんちんを見て、優しげに微笑んでくれる。
現実の若草サクラはこんなこと決して言わない。だって若草サクラはまだまだ子供だから。胸

も膨らんでいるかどうかもわからない。こんないやらしいことは決して言わないはずだし、興味を持っているかすら怪しい。

ああ、僕ばっかり先に大人になっちゃった。毎日毎日オナニーして……。サクラちゃんでエッチなことばかり想像しちゃう……。

ごめんね、サクラちゃん。オナニーのオカズにしてごめんね。妄想の中でエッチな女の子にしてごめんね。でも僕、もうおさまらないんだ。サクラちゃんのことが好きすぎて、セックスしたくてたまらないんだ。

はぅぅ……サクラちゃんとセックスがしたいよ……。サクラちゃんにおちんちんシコシコしてもらいたい。サクラちゃんのオマンコをペロペロしたい。何回オナニーしても、気持ちがおさまらないよ……。サクラちゃんも僕と同じようにエッチな女の子だったらいいのに。同じ気持ちを共有できればいいのに。

でも、そんなこと、あり得るはずがない。こんな変態なこと考えて、行動しちゃってるのは僕だけ。性欲で自分をコントロールできない。性欲のオバケだ。こんなの僕しかいない。僕だけ、僕だけ……。

孤独。

オナニーしているからおちんちんから幸福があふれてくるけれども、それとともになんとも言えない寂しさが僕を包んでいく。

僕は、どうすればいいんだろう。

そう考えながら、僕はおちんちんを刺激する手を強めていった。スカートのザラザラした感触が、僕のおちんちんにくっきりと感じた。

もうなんでもいいや。おちんちんさえ気持ちよければ……。

おちんちんの高まりが全身に広がっていき、全身の高ぶりがおちんちんへと凝縮していく。

コハル「行くよ、サクラちゃん、行くよ。おちんちんからいやらしいネバネバ精液出すよ。サクラちゃん、受け入れてね……！」

僕は孤独を感じながら、誰もいない空間に向かって呟いた。